

父親の自己受容に関する研究 —2000 年代初頭を対象として—

加藤 望

Research on father's self-acceptance -Target to be in the early 2000s-

Katou Nozomi

男性は自身が妊娠・出産という身体的変化を伴わないまま、我が子の誕生により父親となる。それゆえ生物学的に父親になるということと、気持ちの上で自己を父親であると受容することは切り離して考える必要がある。本研究では、幼児期の子どもを育てている男性からの自由記述により「父親になったと実感するとき」について、SCATを使用し分析を行った。結果として、父親が自己を父親だと受容するきっかけが明らかとなった。

Keywords : 父親, 自己受容, SCAT, 実感
Father, accepts oneself, SCAT, feeling

1. 問題と目的

父親が積極的に育児に関わることは、子どもの問題行動を抑制し(菅原他, 1999)、母親の精神的ストレスを軽減する(尾形・宮下, 1999)等、子どもの成長発達や子どもを取り巻く育児環境への肯定的な結果をもたらすことがこれまでの研究により明らかにされている。近年、日本ではイクメンプロジェクトと称して(厚生労働省, 2010)、父親による育児の推奨、父親の育児休暇取得の奨励を行っている。

父親が積極的に育児に関わる行動変化の要因については、パートナーとの関係性が良いほど促進されるもの(小笠原, 2010)であり、子どもとの交流を通してより深まるもの(尾形・宮下, 1999)であるという研究報告もある。その一方で、父親たちの生き方満足度は、家庭関与と職業役割のバランスに関与し(大野, 2012)、家庭役割でのストレスが原因で生じる葛藤が高い父親は、父親になったことによって家族への愛情が深まったとは感じない(森下, 2012)という研究結果もある。つまり、ただ単に父親が育児や家庭に関与すればよいのではなく、関与の仕方やその質が、子どもや家族、父親自身の幸福を左右している。

そこで、夫婦共に有職の家庭においては、父親が就労状況や職場の環境を変える努力をしている事例の研究報告もある。善積(2014)によると、親となった男性は職場において「上司に増員・配置転換・時間外労働制限利用を要求」したり、日常的に同僚や上司と会話する中で、夫婦共働きであることや、子どもの行事があることを伝えて布石を打っておく等「職場の理解を得られる努力」を行ったり、「仕事の効率を上げ、勤務時間内で終える努力」をし、家庭や育児に関わる時間を確保しようとする実践例が報告されている。

これらの先行研究にあるように、父親の育児関与が子どもの成長発達に肯定的な結果をもたらすことや、父親が家庭関与と職業役割のバランスをとって生活することは、子どもにも父親本人にもひいては家族にも幸福をもたらす営みである。父親が子どもと積極的に関わろうとすること、自ら家庭と仕事のバランスをとろうと奮闘する根底には、父親自身が自己を父親として受容しているからであると考えら

れる。

では、男性が父親として自己を受容するとはどのようなことなのだろうか？これまでの研究では、父親が自己を父親として受容する要因、つまり積極的に育児へ関与するための内発的動機付けの要因は明らかとなっていない。

女性が妊娠・出産という身体的・形態的变化や経験を経て母親になることとは異なり、父親は父親になるにあたり、身体的・形態的な変化は生じない。つまり、身体的・形態的变化以外の何らかの方法により男性は自己を父親だと認識し、周囲から期待される父親の役割を担い、自己を父親だと受容していくのだと考えられる。

本研究では、生物学的に父親となった男性が、自己を父親だと実感する場面から、自己を父親だと受容していくための要因とその一助を解明することが目的である。

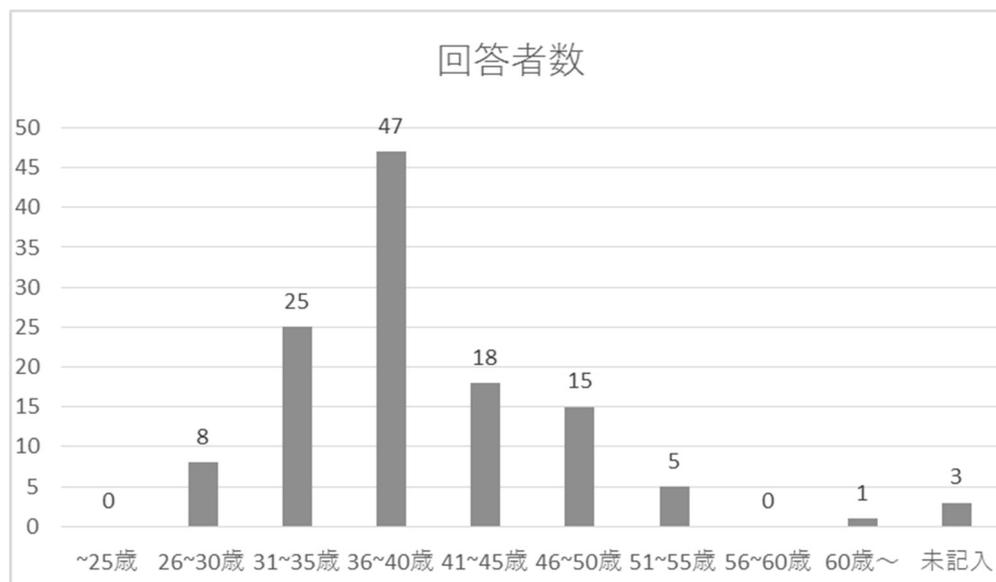
2. 方法

2～6歳児を含んだ子どもを育てている保護者のうち、男性（以下、父親）に対して自由記述形式の質問紙調査を行った。調査時期は2002年10月である。小笠原（2010）によると、1996年以降、男性の親性に関する研究はほぼ毎年行われているが、その研究件数は少なく、2003年の次世代育成支援対策推進法・少子化社会対策基本法の制定を受け、2005年によく増加している。2002年はその狭間にあり、当時の父親たちは親になることをどのように実感していたのであろうか。今後の研究における予備調査として、今回は2002年のデータを使用して分析を行う。

回答者の属性は28歳～62歳（平均39.1歳）の有職男性であり、うち35歳～42歳が半数以上を占めている（表1参照）。また、回答時において、第一子の年齢は2歳以上18歳以下であり、どの父親も父親という立場になって少なくとも2年以上は経過しており、長くても子どもが成人する前の18年以下である。100%配偶者がおり、

配偶者の有職率は38.9%である。

表1 回答者の年齢分布



質問紙調査では、生物学的回答ではなく心理学的回答を得るために、前文にて「子どもが生まれて戸籍上の事実及び生物学的な父親になる」と「気持ちの上で父親になる」ことを区別して考えていただきたいことを述べた。その上でまず「自身を気持ちの上で父親になったと思うか」を聞いている。本研究では、分析の対象として「父親になったと実感するとき」という質問項目を抽出して分析した。全回答者122名（属性については表1 回答者の年齢分布参照）のうち、前文の質問に「はい」と答えた114名を分析対象とした。また、本研究は質的研究であり、量については分析対象としない。

回答を分析する手法として、大谷（2008）が提唱している Steps for Coding and Theorization（以下、SCAT）を用いた。ただし、本研究では、自由記述による回答を分析しているため、同じく SCAT により自由記述回答を分析した副士・名郷（2011）の分析方法を参考とした。

まず、全ての自由記述回答を一字一句違わぬよう（誤字脱字も回答のまま）エクセルシートに入力し（表 2 参照）、その文章の中から「注目すべき語句」を抜き出す（表 2 における <1> 部分）。その際は、テキストをよく読み、背景やその奥にある隠れた意味を読みだすつもりで、テキストに潜む内的現実、内的過程、内的構造を読み解くつもりで読み、重要な部分を抜き出す（大谷，2008）。

表 2 自由記述回答入力（一部抜粋）

自分を「父親だ」と実感する時	<1>テキスト中の注目すべき語句
子供が言った嘘に対し、真剣に怒り、言いかかせている時。 子供といっしょに、自分が父親と遊んだこと（魚釣り等）を同じように遊んでいる時。	嘘に対し、真剣に怒り、言い聞かせている時/自分が父親と遊んだことを同じように遊んでいるとき
子供が自分の事をパパと言う時。	パパと言う時
妻が厳しく叱る時、安全地帯役をかって出る時でしょうか♪ そうでありながらも！妻が「お父さんが良いて言ったらね」と最終決済権を委ねる時	安全地帯役/最終決済権
一緒に遊ぶ時、悪いことして叱っている時、寝顔を見ている時、いろんな物事を教えている時	一緒に遊ぶ/しかっている時/寝顔を見ている時/教えている時
子供と遊んでいる時、体調の悪い子供を介抱している時、体調の悪い自分を子供が心配している時、子供をしかっている時、その他いろいろ	遊んでいるとき/介抱している時/自分を子どもが心配している時/しかっている時
子供が日々、成長してゆく事。（毎日）	成長してゆく事
私の家では、子供にお父さんと呼ばれていますが、お父さん、お父さんと慕ってくれた時や、つい自分の子供の方が他の子より勝っていると勝手に思った時に。	お父さんと慕ってくれた時/自分の子供の方が他の子より勝っている

次に、<1>テキスト中の注目すべき語句をひとつずつ分け（表 3 参照）、同種及び同様の語句を使用している自由記述ごとにまとめる。その後、それらの語句の背後にある意味を含めて、別の言葉に言い換え、「データ外の語句」を考える。その際、<1>の結果では同じ語句を使用していることから、同じ項目にまとめた語句にある背景が、本当に同じであると言い切ってよいのかを元の自由記述データから十分に吟味し、再度振り分けを行いながら<2>テキスト中の語句の言い換えを記入する（表 4 参照）。

表 3 語句の分割（一部抜粋）

自分を「父親だ」と実感する時	<1>テキスト中の着目すべき語句
子供が言った嘘に対し、真剣に怒り、言いかかせている時。子供といっしょに、自分が父親と遊んだこと（魚釣り等）を同じように遊んでいる時。	嘘に対し、真剣に怒り、言い聞かせている時
	自分が父親と遊んだことを同じように遊んでいるとき
子供が自分の事をパパと言う時。	パパと言う時
妻が厳しく叱る時、安全地帯役をかって出る時でしょうか♪ そうでありながらも！妻が「お父さんが良いて言ったらね」と最終決済権を委ねる時	安全地帯役
	最終決済権

一緒に遊ぶ時、悪いことして叱っている時、寝顔を見ている時、いろんな物事を教えている時	一緒に遊ぶ
	しかっている時
	寝顔を見ている時
	教えている時
子供と遊んでいる時、体調の悪い子供を介抱している時、体調の悪い自分を子供が心配している時、子供をししかっている時、その他いろいろ	遊んでいるとき
	介抱している時
	自分を子どもが心配している時
	しかっている時
子供が日々、成長してゆく事。(毎日)	成長してゆく事
私の家では、子供にお父さんと呼ばれていますが、お父さん、お父さんと慕ってくれた時や、つい自分の子供の方が他の子より勝っていると勝手に思った時に。	お父さんと慕ってくれた時
	自分の子供の方が他の子より勝っている

表 4. <2>テキスト中の語句の言い換え(グループ化, 一部抜粋)

代表的なテキストデータ	グループ化
子どもの友達に"〇〇ちゃんのパパ"と呼ばれる	他者が私を「父親」だと認知している
「お父さん」と言われた	
我が子がお父さんと呼ぶ	我が子が私を「自分の父親」だと認知している
子供が「パパ」と呼んでくれる	
子供に出迎えられた	帰宅時、我が子に迎え入れられる
「おかえり」と言われた	
写真をみる	視覚的に子どもの姿や所有物を確認する
玄関でくつをみる	
あそんでいるところを見る	視覚的に子どもの経験を認知する
ビデオで子どもの撮影	
どんな時(運動会、行事等)でも自分の子供を追いかけている	
人に「よく似ているね」と言われる	外見や行動が似ていることを理解する
しぐさが自分に似ている	
顔が自分に似ている	
手を繋いで歩く	子どもの温もりや小ささを肌で感じる
子供をだっこ	
子供を抱いていて、子供が自然に眠った	
手の小ささ感じた	

更に、注目したテキストをグループ化し、それを説明するための語句を「 」に記入し、その結果から、【 】内にはそこから浮き上がるテーマ・構成概念を表した(表5参照)。

表 5 言い換えと概念化（一部抜粋）

【感覚を使用して我が子を認知する】「視覚や感触から我が子の存在を認知する」	
視覚的に子どもの姿や所有物を確認する	写真をみる
	玄関でくつをみる
視覚的に子どもの経験を認知する	あそんでいるところを見る
	ビデオで子どもの撮影
	どんな時（運動会、行事等）でも自分の子供を追いかけけている
外見や行動が似ていることを理解する	人に「よく似ているね」と言われる
	しぐさが自分に似ている
	顔が自分に似ている
子どもの温もりや小ささを肌で感じる	手を繋いで歩く
	子供をだっこ
	子供を抱いていて、子供が自然に眠った
	手の小ささ感じた
子ども関連の書類を記入したり、制度を利用する	子供の入園等の書類/「保護者」の欄に氏名
	児童手当支給
【充実した時間の共有】「時間や経験や行動を共にする」	
我が子の存在を認識し、時間や経験や話題を共有する	子供のことを思いうかべる
	子供といっしょにいる
	テレビを見たり/くつろいだとき
	表情を見ているとき/いつの時でも
	子供と語り合う
子どもの存在が日常生活の一部となっている	日常生活の中
	あたり前
	フルタイム子供の事考え

3. 結果と考察

自己を父親だと実感する

以下、研究の結果得られた父親としての自己認知に対する概念について、一つずつ考察を行う。なお、代表的なテキストデータ欄については、父親からの自由記述回答から作成している為、誤字脱字についても原文のまま記載している。

表 6-1 自己を父親だと実感する：無意識下による認識

グループ化	代表的なテキストデータ
【無意識下にある認識】「言語化することの難しさ」	
日常、ありきたりのこと	毎日
	特に実感しない
	日々の暮らしの中で
	日常生活の中
	あたり前
	フルタイム子供の事考え

まず、日常、ありきたりのこととして父親であることを認識しているという回答（表 6-1）について考察する。これを概念化するにあたり、自身が父親であることに特別な意識を向けてはいないが、質問紙前文で自己を父親だと認識していると回答している為、【無意識下にある認識】とした。これらは、父親だという実感を「言語化することの難しさ」を表しているのだと考察した。本研究で行っている概

念化が、自己が父親であることを実感するにあたり、「言語化することの難しさ」を抱いている父親たちの支えになれば意義深い。

表 6-2 自己を父親だと実感する：ラベリングによる認識

グループ化	代表的なテキストデータ
【ラベリングによる認識】「父親」という名称により認識する	
我が子が私を「自分の父親」だと認知している	我が子がお父さんと呼ぶ
	子供が「パパ」と呼んでくれる
他者が私を「父親」だと認知している	子どもの友達に「〇〇ちゃんのパパ」と呼ばれる
	「お父さん」と言われた

次に、表 6-2 の通り、自己を父親だと認知する方法については、「お父さん」「パパ」等と呼ばれる【ラベリングによる認識】が挙げられた。これには、我が子からのラベリングと、我が子以外の他者からのラベリングによるものがあった。(ここでのラベリングとは、犯罪学におけるラベリング理論で使用されているように、人をある固有の名称で呼ぶことという意味では同じだが、犯罪学では主に逸脱者を非行とラベリングすることの是非を論じている点とは異なる。)(藤本, 1978)

一般的に子どもが最初の言葉(初語)を発するのは1歳近く(針生, 2015)であることを考慮すると、我が子からのラベリングは子どもが誕生してから1年以降において行われ、それに伴い父親だという自己認識は強まっていくのだろう。更に、我が子が発話に至るまでの期間では、主に他者からのラベリングが父親であることの認識を支えているとも考えられる。従って、父親になった男性に対して子どもの言葉を装って「パパ」「お父さん」と代弁することや、周囲の人が「お父さん」と呼びかけることは、父親としての認知を促進しているといえる。

ここでもう一つ検討したいことは、父親自身が自己を「お父さんがね…」「パパだよ」と自称することは、自己を父親として認知する上では関係がないという点である。親族名(お父さん、パパ等)を自称詞として使用することには、親という役割を言語的に確認するとともに、間接的に相手を従属的な位置に置く(佐藤, 2011)と言われてはいるが、本研究の結果では、自身を父親だと自称することにより父親であることを認知するという回答は得られなかった。父親たちが自分自身をどのような言葉で呼称しているかは調査項目にないため、それ以上のことはわからないが、大切なことは周囲の人物が父親を父親であると認知して、親族名称を使用して呼称するという点である。

表 6-3 自己を父親だと実感する：我が子による父親受容感

グループ化	代表的なテキストデータ
【我が子による父親受容感】「我が子からの認知と受け入れられ感」	
我が子が私を「自分の父親」だと認知している	我が子がお父さんと呼ぶ
	子供が「パパ」と呼んでくれる
帰宅時、我が子に迎え入れられる	子供に出迎えられた
	「おかえり」と言われた

自己を父親だと実感するにあたり、「我が子からの認知と受け入れられ感」も大きな意味を持つ。これを【我が子による父親受容感】としたが、我が子が父親を父親だと認め、父親自身が我が子に受容されていることを意識することにより、父親であることを実感する。父親であることを自己受容するためには、我が子から父親として受容されていると認識することが関与している。

高校生の自己受容・他者受容と親との関わりの関連を研究した藤川他(2015)によると、高校生の子どもにとって、父親に受け止められているという安心感は、自分自身を受け容れられる力に繋がっているという。自己受容と他者受容の間に相互に正の相関があることは、諸研究でも言われていることである(服部他, 1991)が、これはつまり、父親側にとっても子どもに受け容れられていると感じることは、自己を受容することへ繋がっていると考えられる。

表 6-4 自己を父親だと実感する：感覚を使用して我が子を認知する

グループ化	代表的なテキストデータ
【感覚を使用して我が子を認知する】「視覚や感触から我が子の存在を認知する」	
視覚的に子どもの姿や所有物を確認する	写真をみる
	玄関でくつをみる
視覚的に子どもの経験を認知する	あそんでいるところを見る
	ビデオで子どもの撮影
	どんな時（運動会、行事等）でも自分の子供を追いかけている
外見や行動が似ていることを理解する	人に「よく似ているね」と言われる
	しぐさが自分に似ている
	顔が自分に似ている
子どもの温もりや小ささを肌で感じる	手を繋いで歩く
	子供をだっこ
	子供を抱いていて、子供が自然に眠った
	手の小ささ感じた
子ども関連の書類を記入、制度を利用する	子供の入園等の書類/「保護者」の欄に氏名
	児童手当支給

視覚や触覚といった【感覚を使用して我が子を認知する】には、まず、子どもの姿や所有物等、実際に形として存在するものを視覚的に確認することが挙げられた。また、子どもとのスキンシップを通してその温もりや小ささを肌で感じるにより、自身が父親であることを実感していることもわかった。幼少期の身体接触の経験は親子間の愛着形成に影響を及ぼす（相植，2009）ことが先行研究からわかっているように、子どもとのスキンシップは父親に父親であることの認知を育んでいると言えよう。

また、子ども関連の書類を記入、制度を利用することに関しても、保護者欄に自分の名前を記載することや支給された児童手当の通帳記入欄を視覚的に認知することで、自己を父親であると認識するのだと捉えた。このように保護者欄に自身の名前を記入する行為は、父親であることに「責任」を感じていると捉えることもできる。森下（2006）は、父親の発達とそれに関わる要因についての研究の中で、子どもに対する「責任感や冷静さ」も父親としての発達要因のひとつであることを指摘している。父親たちは、その「責任」を視覚的な感覚を使用して感じていることが今回の分析結果から明らかとなった。

表 6-5 自己を父親だと実感する：我が子の健やかな成長の確認

グループ化	代表的なテキストデータ
【我が子の健やかな成長の確認】「一日の終わりの行事などの節目を通して、我が子の成長を喜ぶ」	
我が子の健やかな成長を視覚的に確認する	子供の寝顔を見る
	子供の成長を感じた
	子供の寝息を聴いている
	子供が喜ぶ姿を見て、幸せを感じる
	子供の成長を喜ばしく思う
帰宅時、我が子に迎え入れられる	子供に出迎えられた
	「おかえり」と言われた
子ども関連行事経験	クリスマス/七五三/行事に参加
	子どもの行事に参加

父親たちは日々の生活を送りながら、もしくは子どもの成長を祝う行事等を通して、【我が子の健やかな成長の確認】をし、これを父親であることの実感としている。父親が自己を父親であると認識する上で、我が子の健康と安全、つまりは無事を確認してその成長を振り返ることは、父親が父親としての役割を無事に果たしていることへの確認でもある。これまでの我が子の成長過程を振り返り、父親としての自分を振り返ることである。山口（2010）は母親の発達に関する研究の中で、母親は「成長した子ども

もの姿に気づいた時」、自身を母親として一人前になったと評価していることをあげ、親子が相互作用の中で発達と同時に進んでいくことを「共発達」と述べている。このことは父親においても同様であると考えられ、父親は【我が子の成長の確認】を通して自身の親としての発達を感じていると捉えることが出来る。

表 6-6 自己を父親だと実感する：充実した時間の共有

グループ化	代表的なテキストデータ
【充実した時間の共有】「時間や経験や行動を共にする」	
我が子の存在を認識し、時間や経験や話題を共有する	子供のことを思いうかべる
	子供といっしょにいる
	テレビを見る/くつろいだとき
	表情を見ているとき/いつの時でも
	子供と語り合う
入浴時の関わり	お風呂と一緒に入っているとき
	風呂に入れるのは自分の役目
娯楽目的での外出	家族で買い物
	公園に行く
	一緒に旅行
	家族で出かけたとき

【充実した時間の共有】という概念の出現は、これらの項目が改めて時間を設定する、もしくは育児行動に含むほど負荷の高い行動ではない所以である。例えばテレビを見る・一緒に旅行をするといった項目は父親自身も一緒に行う行動であり、父親自身の余暇の部分でもある。また、入浴についても日常生活の一環であり、自由記述の内容からく2>それを言いかえるためのデータ外の語句を考えると、子どもの身体を清潔に保つ目的よりも時間を共有することに重点が置かれていた。

これらは、日々の生活の中で子どもとの関わりを表している。先行研究において、父親の育児行動を尺度化する際の因子として、「登園降園と身体的な世話」や「遊びと身の回りの世話」「しつけ」という3因子が使用されている（佐藤，2015）。

このように家族で出かけることや旅行すること、テレビを見たりくつろいだりするときや、話をしているときなど、日常生活において子どもと関わる様々な育児行為以外の場面において、父親は自己を父親だと認知していることが明らかとなった。

表 6-7 自己を父親だと実感する：自分とは異なる存在としての子どもを感じる

グループ化	代表的なテキストデータ
【自分とは異なる存在としての子どもを感じる】「子どもの主体性を生かした関わり」	
子ども主体の行動を共に行う	一緒に遊ぶ
	遊び相手、相談相手になれるようになった
	子供に絵本を読んでいる
	公園で遊ぶ
子どもの意思を感じる	反抗されたりする
我が子の怪我や病気を心配し、看病する	子どもが熱を出しているとき、看ながら
	病院に連れていく

父親は、子どもと一緒に遊ぶ、反抗される、看病をする等、子どもと自己を切り離して思考して行動するような「子どもの主体性を生かした関わり」を通して、自己を父親であると実感する。我が子が自分とは異なる一人の人間であることを尊重して、子どもが望む活動（例えば遊ぶこと、絵本を読むこと等）を行う際に父親は父親であることを実感している。子どもから反抗されるという

非受容的な行動についても、我が子が自己とは異なる意思の持ち主であると気付くことにより、父親としての自己を実感している。このように、他者と自己を異なる存在として感じるもしくは考えることは、父親の自己受容を育んでいると言えよう。

表 6-8 自己を父親だと実感する：自己の思考及び行動の変化に対する気付き

グループ化	代表的なテキストデータ
【自己の思考及び行動の変化に対する気付き】「環境と心境の変化に対応する」	
世代交代や歳月の経過を意識する	自分が父親と遊んだことを同じように遊んで
	自分の親を見て年をとったと思う
	子どもには自分を超えて欲しい
	自分の父親と自分を比較する
自己意識の変化に気付く	まわりの子どもがちがう見方ができるようになった
	同年齢頃の子を見ると/自分の子供の事を思ってしまう
	出張で家をあけている時
	子供の行事に合わせた休暇の予定を考え/何事も、子供優先
	自分の時間を楽しんでいるとき/ふと家族のこと思い出
	周囲の客への迷惑を考えると/社会的責任を感じる
	行方不明の子供の捜索/日没によって中断/報道に無精に腹を立てている自分に気がついた
オモチャ屋に入りたくない	
行動の変化に気付く	子供向け番組の主題歌/口ずさむ
	おもちゃを買う
	何よりも家族の予定を優先する
	NHK教育TVをみる
	自分のしたい事はすべて忘れて/子供とかかわりたくなる
時間や行動に制約がある	みたいTVがみれない
	子供の為に自分を優先しない選択
	自分の時間が殆どもない

【自己の思考及び行動の変化に対する気付き】において注目すべき概念は、【気付き】の部分である。ここでは、父親になったことにより、自己の思考や行動が変化したこと、父親自身が気付き、自覚していることが父親としての自己認知に関わっている。更に注目すべきは、これらの変化が必ずしも肯定的な変化ではないという部分である。例えば時間や行動に制約が伴うというような否定的な内容でも、自己を父親であるが故と認知している。生活の中に制限ができることを父親であることと実感とするのは、父親として発達しているということとも捉えられる。受容の定義として、ありのままの特徴を受け入れる態度を指す研究（川岸，1972）もあることから、自分の欲求や行動に反した生活の制限を受け入れることも、自己を父親だと認知する一因となっている。

表 6-9 自己を父親だと実感する：年長者としての教育的な関わり

グループ化	代表的なテキストデータ
【年長者としての教育的な関わり】「年少者に対して物事を教授する」	
我が子の価値観と規範意識を育てようとする行動	躾について考える
	子供が言った嘘/真剣に怒り/言い聞かせている
	怒るべき時は怒り/ほめるべき時はほめている
	子どもが悪いこととして叱っている時
	食事での注意をする
教育的意図や学習目的での子どもとの関わり	いろんな物事を教え
	子供に勉強を教えている
	子供の教育に悩む

父親は、我が子に対して【年長者としての教育的な関わり】を行う際にも、自己を父親だと認知している。住田他（2009）は父親たちへ質問紙調査を行い、父親自身が考える育児行為の種類を分析している。その結果、基本的な「世話」、経済的な基盤を支える「扶養」、社会的ルールを教える「社会化」、情操を育み知的能力を引き出す「教育」の4つに育児行為を分類した。つまり父親たちは子どもへ【年長者としての教育的な関わり】方を行うことで、育児行為をしていると考えており、育児行為をしている自分は父親であると認知している。

表 6-10 自己を父親だと実感する：社会から期待される父親役割に対する意識

グループ化	代表的なテキストデータ
【社会から期待される父親役割に対する意識】「我が子（妻）から期待され、頼られる」	
男性性別役割としての「父親」役割を担う	怪獣ごっこの怪獣/力仕事/ゴミ出しなどを要求された
	母親に出来ない事などたのまれた
	母親とは違った角度で物の見方考え方を教えてあげる
	体力の必要な遊びに付き合って
家庭内において安全地帯役割や 対人葛藤仲裁役割を担う	母親との親子げんか兄弟げんかの際、仲裁した
	安全地帯役をかって出る
	家族から頼られ/家族を守る使命感がわく
育児行動をしている自負	育児をしている
	子の世話
	保育園の送迎
家計を考え、経済的安心感を得る	最終決済権がある
	生計の苦勞、社会経済情勢の先行不安から家族を守ろうと考える
	給料日に経済面で潤った時
子どもが私を信じて頼り、甘え、 慕っていることを感じる	子どもが困っているとき、助けてあげた
	必要とされた、されている
	子どもが甘えてくる
	子どもにしたわれる
	ありがとう大好きなお父さんと言われた
	体調の悪い自分を子供が心配している
子どもの将来や教育について考え、 夫婦で話し合う	夫婦で話し合った/接し方について意見
	子供の事などで母親から相談を受け/最終決断をせがまれた
	子どもの成長や将来の事を考え/妻と話し合い

父親が【社会から期待される父親役割に対する意識】を持つことも、父親としての自己を認知する要因となっている。家族内で期待される父親役割を担うこと、育児行動を担っている自負が、父親を父親だと認知させている。ここでは、男という性別を意識した回答も見受けられた。これはいわゆるジェンダーバイアスによるものだと考察されるが、社会的につくられた性役割という意識が、父親たちの中に存在していることは認めざるをえない。また、ここでは「頼られる」というテキストが頻出している。我が子（または家族）から「頼られる」ことも、父親を父親だと実感させている。

自己に対する肯定的態度は、個人の枠組みだけでなく他者との相互作用の結果得られる「社会的に望ましい自己」によって、基本的に決定される（川岸，1972）というが、今回の研究でも【社会から期待される父親役割に対する意識】に関する回答が見受けられた。

5. 総合考察

男性は自己を父親として受容するに当たり、父親であることを感性的、相互的、時間的、変動的に実感していることがわかった。

第一に、感性的実感について述べる。これには【無意識下にある認識】及び【感覚を使用して我が子を

認知する】という概念化が当てはまる。感性という言葉の使用は学術的ではないと捉えられるかもしれないが、親となるという営みに対して、五感及び深層心理を使用していることを総じて述べるために、ここでは敢えて感性という言葉を使用する。心理的に自己を父親であるかとの質問に対して、「はい」と回答してはいるにも関わらず、自己をそう思わせる要因については詳細に言語化できない場合があることが明らかとなった。更に、五感という【感覚を使用して我が子を認知する】ことは、そこに人間の感性が大きく関与していると考えられる。このように感性的な実感をもって、自己が父親であることを実感している場合も見受けられる。

次に、相互的実感として、他者から「父親」と認知され、「父親」と呼称される【ラベリングによる認識】により、自己を父親であると実感する。次第に、我が子からも父親として認知され、受け容れられ、頼られる【我が子による父親受容感】を感じることに、その実感は確かな自己受容へと発達していく。

また、自己を父親であると実感していく上では時間も必要である。この、時間的実感については、子どもと過ごす【充実した時間の共有】という現在進行形と、これまでの自分や子どもを振り返る【我が子の健やかな成長の確認】という過去形、加えて子どもの将来を考えた未来形である【年長者としての教育的な関わり】という回答が得られた。従来の研究では、父親としての発達を促進する項目は、父親の育児時間の有無や子どもとの交流時間の長さ等、現在進行形の時間について着目されることが多かった。しかし、今回の研究では、父親が父親であることを実感するための時間軸は現在だけでなく、過去や未来へも渡っていることが明らかとなった。また、現在進行形の時間についても、一般的に育児と呼ばれている行為（例えば子どもの送迎や入浴の補助等）には留まらない子どもと過ごす時間について、父親は自己を父親であることを実感していることがわかった。特に、父親自身の娯楽や充実につながるような時間を子どもと共有すること、日々の生活に自然な形で組み込まれているような、テレビをみる、くつろぐといった何気ない行動であっても、父親が自己を父親と実感し、受容するにあたっては重要な意味を成す時間であることが明らかとなった。

更に父親は、子どもを【自分とは異なる存在としての子どもを感じる】こと、自分と子どもを切り離して思考する際にも自己が父親であることを実感している。また、【自己の思考及び行動の変化に対する気付き】として、父親になる前となった後の自分を比較し、変化していることに気付くことで自己を父親であると実感している。これらの実感、父親と子どもが異質の存在であることを認め、父親自身の変化を認めることが実感に繋がっており、変動的実感と言えよう。

これらの父親実感を経て、【社会から期待される父親役割に対する意識】が芽生え、より自己を父親であると肯定的に実感していくのではないだろうか。

6. 今後の課題

本研究で使用したデータは2002年に収集したものである。当時、調査対象とした父親たちも、15年が経過した2017年の現在は、それぞれの人生を歩み、時代の変化も相まって、当時とは異なる父親としての実感を抱いているかもしれない。今後は調査する父親の対象を広げたり、縦断調査を行ったりし、本研究では明らかにできなかった、男性が親として自己を受容していく過程を明らかにしていきたい。小笠原（2010）は男性が父親になることを、性別を問わない親性と呼び、その定義について「生物学的性差を認めた上で、父親、母親の区別無く、親となることで生じた様々な人格的・社会的行動変化を示し、親であることを自覚子どもを育むために必要となる能力。」としている。この「生物学的性差」のひとつとして、男性は親になるにあたり妊娠・出産を経験することはなく、身体的変化を伴うことはない。親であることを自覚する上で、身体的変化を伴わない「生物学的性差」を認めるのであれば、より心理的な変化を追究していく必要がある。

7. 謝辞

本研究を行うにあたり、指導を賜りました皆様にお礼を申し上げます。また、ご多忙中、質問紙調査に協力をいただいたお父様方と、ご家族のご厚意に感謝申し上げます。

引用文献

- 相槌麻里(2009)「身体接触の臨床心理学的効果と青年期の愛着スタイルとの関連」『岩手大学大学院人文社会科学部研究科紀要』18, 1～18
- 藤本哲也(1978)「ラベリング理論の学説史的展望」『犯罪社会学研究』3, 88-105
- 副土元春・名郷直樹(2011)「指導医は医師臨床研修制度と帰属意識のない研修医を受け入れられていない ～指導医講習会における指導医のニーズ調査から～」『医学教育』42(2), 65～73
- 服部智・吉田昭久・小熊均(1991)「「自己受容」の基底因—3—「他者受容」との関連」『茨城大学教育学部紀要 教育科学』40, 361-377
- 針生悦子(2015)「ことばの学習の立ち上がり」『発達141』8～12
- 森下葉子(2012)「仕事と家庭間で生じる役割間葛藤と父親の発達との関連～共働き家庭の父親の場合～」『文京学院大学人間学部研究紀要』13, 155～165
- 森下葉子(2006)「父親になることによる発達とそれに関わる要因」『発達心理学研究』17(2), 182-192
- 小笠原百恵(2010)「親になった男性の「親性」に関する文献研究」『関西看護医療大学紀要』2(1), 11-22
- 尾形和男・宮下一博(1999)「父親の協力的関わりと母親のストレス, 子どもの社会性発達および父親の成長」『家族心理学研究』13(2), 87～102
- 佐藤響子(2011)「父親が使う自称詞:なぜそこでそれが選択されるのか」『横浜市立大学論人文科学系列』62(2), 1-23
- 菅原ますみ, 北村俊則, 戸田まり, 島悟, 佐藤達哉, 向井隆代(1999)「子どもの問題行動の発達: Externalizing な問題傾向に関する生後 11 年間の縦断研究から」『発達心理学研究』10(1), 32-45
- 住田正樹・中村真弓・山瀬範子(2009)『幼児をもつ親の役割意識に関する研究』放送大学研究年報 27
- 山口雅史(2010)『母親になるということ～母親アイデンティティを巡る考察～』あいり出版 37-39